



学生時代はラグビーの魅力に取りつかれ高校・大学・社会人の26年間現役だった。42歳の時、ラグビーの試合で膝の致命的な怪我をして、ラグビーができなくなりテニスに転向した。若い時はラグビー以外のスポーツは考えられず、テニスは羽根つき程度に思っていた。息子が私と同じ旭丘高校に入学した時、ラグビー部を勧めたのに、入部したのはテニス部だった。あの時は軟弱な奴だとながかりした。しかし、いざ自分でテニスをやってみたら、結構ハードなスポーツだということが分かった。そこで、息子の結婚式の父親のメッセージに“あの時言った軟弱な奴は訂正して謝ります。ごめんなさい”と書き込み謝罪した。息子はテニスに打ち込み、名大医学部テニス部の主将を務め、西医体で優勝するほどになった。息子が医者になってから、愛知県医師会テニス大会に頼んで一緒に出てもらったことがあった。普段、ほとんど言葉を交わすこともなかったので、たまにはゆっくり話をする機会にでもなれば、との思いもあったが、試合中ほとんど話をせずに終わってしまった。それでも結果は優勝できたので、お互い気持ちは一つになっていたかな、と満足した。

テニスもやり始めると本当に面白く、始めた当初は上手くなるためにスクールに通ったり本を読んだりして、試合にもよく出るようになった。時折、テニスの試合と学会が重なることがあり、どちらかに決める時はいつもテニスを優先していた。学会を欠席する理由は人には言わなかった。“大切な学会をテニスごときで欠席するとは”という人もいるかもしれないから。人には夫々価値観の違いがあり、自分のテニスの価値観が他人に理解してもらえとはかぎらない。テニスは自分にとって、健康・体力の維持、ストレス解消の手段として生活の一部になっている。テニスを通しての仲間は多く、人との交流の手段としても欠かせない。だから、学会よりテニスの試合を優先している。若い時テニスの価値観を維持できていたのは試合の勝負にこだわっていたからだ。テニスはメンタルなスポーツで、相手に勝つための作戦や駆け引き、その時味わう緊張感が面白い。試合に勝つために上手くなろうと日頃の練習に身が入り、それでもなかなか勝てないから際限のない目標となり長続きしている。手軽にできてこれだけの緊張感を味わえるスポーツは他にはない。

テニスを続けているもう一つの理由がある。50歳の時、早朝テニスでいつも通りに練習に続いて試合を始めた途端、胸がムカムカするのに気付いた。その時はテニスをやめると不快感は消え、仕事もいつも通りに行った。翌朝、同じように練習に続いて試合を始めると、前日と同じ不快感が込み上げてきた。この時、繰り返し起こる

症状から狭心症の労作時不快感に間違いないと自己診断した。病院で調べた結果は自己診断の通りだった。心カテで主冠動脈の起始部に1カ所狭窄が見つかった。主治医からもしこの血管が詰まったら突然死していたと言われた。また看護師さんから“テニスをやっていたから突然死せずにすんだ。ラケットを床の間に飾っておいた方がいい”と言われた。言われた通り床の間にラケットを飾っておいた。バイパス手術を受け、1か月後には元の生活に戻り早朝テニスにも復帰した。今はテニスがトレッドミルの代わりになっている。

テニスをやっていたことで思わぬ役目が回ってきた。愛知県テニス協会の元理事長が八事日赤に入院された際、病室でテニスの話になり、私がテニスをしていることを知って会長を依頼された。ラグビー部出身なのでお断りしたが、テニスが好きであればいいと熱心に懇願され、引き受けることにした。2017年から愛知県テニス協会会長を務めている。

早朝テニスは私と家内の30年来の日課になった。鶴舞公園コートで一緒にやっているのは鶴舞早朝テニスクラブの仲間だ。このクラブは40年以上続いており、メンバーは30人位で40代から80代の医師、床屋、会社員等多彩だ。毎日2面を使って多い時には10人以上集まる。自転車好きな時間に行って好きな時間に帰る気楽なクラブだ。皆早朝の短い時間テニスを楽しむために練習はせず勝負に拘らない試合ばかりだ。1年365日雨でコートが使えない日以外は真冬に雪が降ってもやっている。端から見れば変人と思われるかもしれない。しかし、当人達はやりがいをもってやっているのです。多少の暑さ寒さは応えない。いまテニスは私の人生のやりがいであり、健康長寿の秘訣でもある。たかがテニス、されどテニスである。



鶴舞早朝テニスクラブの仲間